

平成 22 年 6 月 25 日現在

研究種目：基盤研究 C（一般）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520533
 研究課題名（和文） クラス内学力格差に対応する Moodle を利用した
 授業支援システムの開発
 研究課題名（英文） Toward the development of instructional designs using Moodle for
 facilitating differentiated instructions in classrooms
 研究代表者
 山内 真理（MARI YAMAUCHI）
 神戸海星女子学院大学・現代人間学部・講師
 研究者番号：40411863

研究成果の概要（和文）：

本研究では、授業内の学力格差に対応する授業方式として、オープンソースの学習管理システムである Moodle を対面授業に組み込むブレンド型授業を実践し、教材開発・学習活動の組み立てについて検討を重ねた。Moodle を利用したブレンド型授業には、以下 5 点を含む様々な長所が確認された：①習熟度に応じた選択課題の提供が容易である、②画像やスライドショー等の活用が容易である、③ウェブツールとの併用が容易であり、創造的・協調的な学習活動の促進に役立つ、④学習の経過・成果の保存・共有が容易であり、動機づけや自己モニタリングの助けとなる、⑤対面時やウェブ上で活動状況を確認しながら教材・提示方法を調整・改良できる、⑥教材・資料・作品等の管理と再利用が容易である。

これらの長所を活かし、ドリル型課題のための「小テスト」利用、協調学習促進や学習経過のモニタリングのための「フォーラム」利用、発信活動の促進のための外部ツールの併用等、目的に見合った機能やツールを、学習ニーズの違いや教員の労力も勘案して柔軟に組み合わせることで、Moodle は様々な科目で学習者・教員の双方にとって強力な味方となりえる。加えて、個別指導や学習方略指導を授業に組み込むことにより、未熟な学習者の自律学習支援を強化でき、知識・技能の向上、学習動機の維持の両面で教育効果をあげることができた。最終年度にはチーム・ティーチングに Moodle を利用し、教員間の連携面での有効性も認められた。

Moodle は教員・授業単位でも活用できるツールであるが、特に「小テスト」の作成にかかる初期労力が大きい。問題作成管理の効率化を図る手段の一つとして、データベースを利用したソフト開発に着手し、最終年度にプロトタイプを公開した。また、オリジナル教材として、リズム指導を効果的に行うための学習プログラムを試作し、Moodle への組み込みを行った。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育・英語教育

キーワード：Moodle・eラーニング・ブレンド型授業・教育実践・教材開発・自律学習・学力格差

1. 研究開始当初の背景

学力評価を伴わない入試の実施による新入生の学力分散が進んだ現在、同一大学、同

一クラスでの学生間の大きな学力格差は決して特殊な状況ではなくなっている。特に、本研究事例のような小規模大学では、習熟度

別のクラス編成が現実的ではないことから、緊急に対応策を用意すべき課題であると考えた。

本研究で対象とした英語関連科目は、選択科目の TOEIC®テスト対策諸クラス（2007年まで3レベル編成、2008年以降2レベル編成）、「英語科教育法」、「コンピュータコミュニケーション」、そして必修科目の Grammar（2レベル編成）である。受講生の英語力は、最もばらつきの大きい「コンピュータコミュニケーション」では TOEIC®の得点で500点ほどの差が見られることがあり、これほどではないにしても、TOEIC®対策クラスでは200点から300点程度の差が見られるのが常態であった。こうした多レベル混在クラスでは、平均レベルを想定した一律指導ではなく、それぞれの学習ニーズに合った学習活動と、特に下位層に必要な学習支援とを含む授業設計が必要になる。

こうした多様な学習ニーズに対応する一つの手段として、学習管理システムを利用したeラーニングの提供が有望であると考えられるが、市販されている既存のシステムは、一般に、管理運営や教材の開発にかかる負担が大きく、大規模で組織的な利用を想定したものが多かった。これに対し、近年その機能が評価され、2006年頃には日本でも本格的な普及が始まっていたオープンソースの学習管理システムである Moodle は、例えば授業単位での利用などの小規模導入でも活用しうるシステムである。

さらに、以前主流であった CALL システムは特定の教室に縛られ、教材作成なども学内でしか行えないものが多かったが、オンラインでアクセス可能な Moodle は、学習者、教員の双方にとって非常に利用しやすいシステムである。

研究代表者は、この Moodle の可能性に注目し、2006年度の試用により小規模導入が可能であることを確認し、本研究で、クラス内の学力格差に有効に対応するための、Moodle を利用したブレンド型授業のあり方を検討することとした。

2. 研究の目的

本研究の主要な目的は、柔軟な授業設計が可能な Moodle を活用し、学力格差の大きい授業において、参加意欲・学習動機を維持し、必要な学習支援を効果的に提供できる授業方式を検討・開発することである。

具体的には、クラス内学力格差に対応するために、対面授業に Moodle の諸機能（知識確認型学習を提供する「小テスト」モジュール、協調学習に利用できる「フォーラム」モジュール等）を活用した学習活動を組み込み、多レベル対応の選択課題の提供、学生間の協調学習の促進、教師・学生間の対話の強化を

図った。

対面授業にオンライン学習活動を組み込むブレンド型授業に関して、研究当初に期待された効果は下記の通りである。

- (1) 共通の学習項目に関して、学力に応じて選択できる課題（設問内容、設問数、使用語彙、ヒントの有無などを変える）を用意することにより、授業時間内にそれぞれの学生が有意義な学習を進めることができ、授業への参加意欲の維持につながる。
- (2) 授業内活動の続きを自宅で行うことが容易であり、自分のペースで学習を進めることができる。これは学習効果を高め、学習意欲の向上につながる。
- (3) 個別型・協調型いずれの学習についても、Moodle コース上の解説やサンプルなどの助けを借りることにより、教員が個々の学生に一对一で学習支援を与える時間をつくることができる。これは、特に学力不足の学生にとって有効な学習支援の機会になると考えられる。

これらについて検証しながら、各機能の活用方法や、オフラインでの学習活動と組み合わせを含めた、学習効果の高い授業設計の立案を目指した。

また、Moodle の特長の一つとして、練習問題や資料、コース設計などを簡単に編集・修正できる柔軟性があげられる。この柔軟性は、授業単位、教員単位で、受講生の学習状況にきめ細かくタイムリーに対応することを容易にすると考えられる。本研究では、実際の運用を通じて、このような小規模運用の実行可能性を確かめることを副次的な目的としている。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者の担当授業を中心として、Moodle を利用した授業専用コースと自習用コースを作成し、上記の目的に従ってそれらのコースを利用する授業設計を立案し、授業実践と実践結果の検討を行った。ここでの検討事項には、受講生からの授業評価と学習効果、Moodle コースの作成および授業内の利用に関する運用上の問題点が含まれる。

授業で使用するためにレンタルサーバ上に置いた Moodle サイトの設定と管理は主に村上が担当し、Moodle の仕様確認と学習教材開発および動作確認のために学内ネットワーク上のサーバにおいて Moodle サイトの管理は桐谷が担当した。また、授業担当教員個人によるサイト管理の実行可能性を確認するために、山内が平成18年度に引き続き、Moodle のインストールサービスのついた安価なレンタルサーバ上において Moodle サイ

トを管理した。

Moodle の授業用コースおよび自習用コースのための素材収集は、山内、小野、石原、桐谷が分担し、授業用コースの作成と授業実践は、山内、Rink(平成 19~20 年度)、Wedum(平成 21 年度)、石原が担当した。作成したコースは下記の通りである。

(1) 授業用コース

- a. TOEIC®対策 (2 レベル/選択科目: コンピュータ実習室)
- b. 「コンピュータコミュニケーション」(英語を用いたリサーチとプレゼンテーション/選択科目: コンピュータ実習室)
※改組に伴い平成 20 年度が最後の開講となる。
- c. 「英語科教育法」(選択科目: コンピュータ実習室)
- d. 「Oral Communication」(4 技能の向上を目指す英語による授業: コンピュータ実習室/普通教室)
- e. 「Reading & Writing」(読解と作文を組み合わせた英語による授業: 普通教室)
- f. 「Grammar」(1 年次必修科目: 平成 21 年度後期よりコンピュータ実習室)
※自習用コースを兼ねる。
- g. 「演習」(日本語でのリサーチ・プレゼンテーション・ライティング/3、4 年次必修科目: コンピュータ実習室)
- h. 「基礎演習」(日本語を用いたスタディスキルズ/1 年次必修科目: コンピュータ実習室) ※平成 21 年度は、合同クラスでのチーム・ティーティングを行う。

(2) 自習用コース

- a. 「英語リズム学習」(センテンスストレスのリズムパタンの習得およびフォーカスに伴うストレスの発音とききとりの習得の自習教材プログラムを作成し、Moodle に組み込む)
- b. 「イラストで覚える語彙」(テーマ別に整理した画像つきクイズ集/TOEIC®対策コース用に作成した「小テスト」の一部を再利用)
- c. 「Extensive Reading」(「フォーラム」モジュールを利用した多読図書紹介と読書録の共有/「英語科教育法」での自習用コース)
- d. 「Reading & Listening」(VOA 動画などを埋め込んだクイズ集/受講生による学習素材の継続的な蓄積もねらうコース)

平成 19 年度に(a)TOEIC®対策科目 2 クラス、(b)「コンピュータコミュニケーション」、(c)「英語科教育法」、(d)「Oral

Communication」および(g)「演習」において Moodle コースを利用した授業実践を開始し、20 年度、21 年度と順次対象科目を増やしつつ、前年度までの実戦経験に基づいて Moodle 上の教材作成・改良とそれを活用する授業設計の検討を続けた。それと並行して学習素材の集積を進めた。

また、本研究では対面授業に Moodle を組み込む授業方式について検討することが中心であったが、これ以外の Moodle 活用の可能性を探るため、平成 20 年度より、普通教室での授業でも Moodle を導入し検討を開始した。

4. 研究成果

本研究の第一の目的は、学力格差の大きいクラスでの学習ニーズや動機づけの違いに対応し、どのレベルの学習者もそれぞれの学習意欲を維持しながら学習活動を進められる授業方式を開発することであった。3 年間の授業実践の結果、Moodle を対面授業に組み込んだブレンド型授業は、ここで求める授業方式の枠組みとして適切なものであると結論づけることができる。

(1) ブレンド型授業の利点

Moodle を利用したブレンド型授業には以下のような様々な利点があることが確認できた。

- ① 習熟度に応じた選択課題を提供することにより、自分のレベルに合った課題に各自のペースで取り組ませることができる(「小テスト」「フォーラム」モジュール等)
- ② テキストベースのものだけでなく、画像・動画・スライドショーなど様々な形で資料や解説を提供でき、内容理解のための支援を効果的に提供できる(「リソース」「フォーラム」モジュール等)
- ③ ブログ等の外部ウェブツールとの併用が容易であり、創造的・協調的な学習活動を進める助けとなる(「フォーラム」モジュールとの併用等)
- ④ 学習活動の経過や成果の保存や共有(学生間/教員と個々の学生の間)が容易であり、動機づけやその維持、および学習の自己モニタリングの助けとなる(「小テスト」の学習履歴、「日誌」、「課題」、「フォーラム」、「ディレクトリ」の利用等)
- ⑤ オンラインでの個別学習を組み込むことで、対面での一斉学習の時間を、その形態にふさわしい活動に振り分けることができる
- ⑥ オンラインでの個別学習時間に個別指導を行うことで、Moodle 上の学習支援を効率よく補うことができる
- ⑦ 学習者の反応を対面時およびウェブ上で

確認しながら、作成した教材・資料やその提示方法を常に修正・改良していくことができる

- ⑧ 教材・資料・作品の管理と再利用が容易であり、効率よく授業改善を行うことができる。

(2) 「小テスト」モジュールの活用

ここで、主に利用した Moodle のモジュールについて説明を加えておく。特に語彙・文法学習に関しては、自動採点式の練習問題（「小テスト」）の利用価値が高い。写真や絵・アニメーション・動画・スライドショー等、理解や記憶を助けるメディアや、表示／非表示を選べる語注やヒントが容易に組み込めるという利点は、オンライン素材ならではである。また、即時にフィードバック（解説と評価）付きの結果が表示されるため理解度の確認が行いやすく、解説用スライドショー（「リソース」）や学習履歴一覧と組み合わせることで、未熟な学習者でも自習がしやすくなる。

この「小テスト」モジュールを多用したのは TOEIC®対策科目である。上述のように、英語力の格差が大きい選択科目であるが、初年度の授業実践より、多レベル対応教材の同時配信と、即時フィードバックや学習履歴表示が、クラス内の学力格差対策として有効であることが確認できた。一方で、下位層の受講生に関して、いくつかのデメリットも観察された。未熟な学習者ほど、選択課題から必要なものを選ぶのが難しく、フィードバックを見直しや反復学習につなげる意識が乏しく、また、Moodle の小テストは行っても、他に必要な英語学習活動（繰り返し声に出してみる、繰り返し書いてみる、覚えたい事項をノートにまとめる等）にはつながらない。

この結果を踏まえ、平成 21 年度には、上述のような Moodle 以外での基本的な学習方略の使用を促すべく、語彙学習テキストを含む紙媒体利用の学習活動（授業内外）、書き取りや音読練習の効果を体験させる学習活動（授業内）などを Moodle の「小テスト」を利用したドリル学習（授業中は個人指導可）と組み合わせ、さらに振り返りを促す「日誌」利用も導入して、授業を組み立てた。300 点以上の格差のあるクラスでどの学力層の受講生も学力の伸びを見せており、学習習慣の変化や授業満足度の高さからも、このようなブレンド型授業が学力差対策として一定の成果をあげることができたと言える。

運用上の留意点としては、テキストベースのプリント教材に比べ、オンライン教材は作成にかかる作業量が格段に大きく、「小テスト」によるドリル型学習を多用するコースの場合は、ブレンド型で利用するとしても、その教材作成と蓄積の効率化が有効活用の鍵

となる。

教材が蓄積するに従って作成作業は軽減されるが、再利用を想定して問題を作成しておくとともに効率化を図ることができる。複数のコースで問題を用いて再利用するために、できるだけ公開可能な素材を利用すること、そして（現時点の仕様では）組み込むメディアは Moodle の外に保存し、ハイパーリンクで「小テスト」からアクセスする形をとることが望ましい。本研究では、授業用コースのために作成した問題を他の授業用コースで利用するだけでなく、テーマ別に配列した自習用語彙学習コースを作成した。問題 ID のつけ方等の工夫で教材データベースとしての Moodle の利便性はさらに高まるだろう。

教材作成管理の効率化の一つの手段として、平成 21 年度に、教員間での教材共有も視野に入れたソフト開発に着手し、プロトタイプを公開した。今後もこのソフトの改良を含め、引き続き教材作成・管理の効率化を検討していく予定である。

(3) 「フォーラム」モジュールの活用

「フォーラム」モジュールは、意見交換以外にも、授業内で様々な活動に利用しうる。本研究では、「コンピュータコミュニケーション」、「英語科教育法」、「Grammar」、「基礎演習」、「演習」では、自由英作文、多読活動の一部としての一言感想文、グループ討論のまとめ、発表の下準備、リサーチ経過の報告など、様々な形で、作品・発信活動に利用した。「基礎演習」「演習」では、リサーチ過程を記録し、疑問点などについて主に教員とやりとりを行うために、個人用のフォーラムも利用した。

この授業実践により、協調学習をより円滑かつ効果的に進め、学習経過のモニタリングを促進する目的でフォーラムが利用できることが観察された。紙媒体による提出とは異なり、課題英作文などを課した場合、同じ回の授業内で共有し、その場でフィードバックを与えたり、投稿された作品をもとに会話活動につなげたりすることができ、授業内の活動の幅を広げるのに役立つ。また、比較的困難な課題の場合は、「フォーラム」を利用してスモールステップ化することも容易である。また、授業中、作業や議論の進み具合を観察して、その場で「フォーラム」を設置することも容易であり、授業内の活動を柔軟に調整することができる。共有された作品や学習経過は、未熟な学習者にとってはよい手本にもなる。

本研究では、対面授業内でコンピュータを利用したが、フォーラムを中心として、必要なリソースを配置し、「課題」「日誌」モジュールを用いた教員と学生個人のやりとりの場を設置した課外学習用のコースを用意し

て、普通教室での授業と連動させるといった利用形態も考えられる。

(4) Moodle と外部ウェブツールとの併用

現在、教育目的で利用できるウェブツールは種類も数も多い。無料で利用できるサービスも多く、多くは技術面で専門的な知識がなくとも容易に利用できる。本研究では、一つの Google アカウントで様々なサービスが利用できる Gmail, Blogger, Google Docs を中心として情報の収集・管理・発信・共有を含む学習活動を行った。また必要な情報を自ら求める能力を身につける手助けとして、Google 検索の基本やオンライン辞書の活用法を学ぶ活動を組み込んだ。Google 関連のツールを使うスキルは、当該の授業の後も広く活用できる意味でも、学習価値が高い。

「コンピュータコミュニケーション」(リサーチ・プレゼンテーションスキル) や「英語か教育法」などの授業では、Moodle 上のシラバス、資料やサンプル、フォーラムと連動させる形で、このような外部ウェブツールを積極的に利用する調査や発信活動を行った。

Blogger を利用した個人ブログの作成・記事投稿は、携帯電話との親和性、カスタマイズの容易さの点で、Moodle のブログ、あるいはフォーラムよりも、学習者の自主的な発信活動に適している。個人ブログ上で、情報を整理し、画像、ハイパーリンク、GoogleDocs を利用したスライドショーなどで充実させた記事を作成・公開し、互いにコメントし合う活動は、学習者に満足感と達成感と与えることが確認された。満足度の高い学習者ほど自由投稿を活発に行い、ライティングの流暢さが増した。

外部ツールの利用が最も多かったのは平成 20 年度の「コンピュータコミュニケーション」であり、ここでは、核となる学習目標(英語を用いて、リサーチ・プレゼンテーションを行う)に関連して、Google の各種検索を使い分ける、ファイルをアップロードするといった下位スキルを段階的に身につけるよう配慮した自由度の高い課題を与えた。さらに、個人ブログの自主活動も評価することで、個人の作業進捗度の違いにかなりの程度まで対応することが可能になった。シラバスの微調整が適宜必要ではあるが、これは Moodle で容易に行うことができる。最終的な到達点には当然のことながら差が生じたが、自分ができなかったことができるようになったという達成感、友人と刺激し合う楽しさから、学習者の満足度は全体的に極めて高かった。

このような形の授業設計の場合、Moodle コースを作成する労力が小さくてすむという利点もある。個々の作業過程への目配りや

作品への評価に十分な労力を割くことことができる。デメリットとしては、全ての活動を Moodle 上で行う場合とは異なり、評価が手作業になるという点あげられ、これに関してはさらに検討する必要がある。

学習管理に優れている Moodle と、学習者主導の自由な活動により適した外部ツールを目的に合わせて組み合わせることで、教育効果が高まることが期待でき、この意味で、外部アプリケーションへの拡張性が向上している Moodle2.0 は、さらに利用価値が高まっていると考えられる。

(5) その他

Moodle 利用の新たな試みとして、平成 21 年度には、「基礎演習」の合同クラスでチーム・ティーチングを行った。教員間の連携を容易にする目的でも有効性が認められたが、教員への Moodle 利用に関する説明・デモの提供の点で課題が残った。

また、平成 20 年度に、普通教室での授業における学習支援や、課外学習促進のために、携帯電話用のモジュールである「Moodle for Mobiles」を導入する準備にとりかかった。しかし、日本の携帯電話はキャリアや機種ごとの違いが大きく、これに対応するのは断念せざるを得なかった。現在、このモジュールは、主にスマートフォンを想定して開発されている。

ただし、普通教室の授業においても(平成 20 年度、21 年度前期の「Grammar」)、ブログ投稿などに携帯電話を随時利用することにより、発信活動に対する動機づけが促進されることが観察されている。学習者にとって非常に身近なツールの教育利用については、今後も検討を重ねていきたい。

また、日本人英語学習者に不足しがちなリズム(ストレス・イントネーション)の訓練を効果的に行うためのオリジナル教材の開発に着手した。学習プログラムを設計し、一定量の素材を蓄積し、Moodle への組み込みの目処がたったところである。このプログラムの開発も、引き続き進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

1. 山内真理. 自律学習促進を目指す授業設計: TOEIC 対策科目における Moodle 活用実践報告. 2010. 『神戸海星女子学院大学研究紀要』, 第 48 号, pp. 107-123, 2010, 査読無
2. 石原敬子, 桐谷滋, 英語のセンテンス・ストレス、フォーカス学習のコンピュータ教材の試作, 『神戸海星女子学院大学研究紀

要』, 第 48 号, pp.1-1, 2010, 査読無

3. Mari Yamauchi. Integrating Internet Technology into the EFL Classroom: A Case Study. P. A. Danaher, S. et al (Eds.), *International Journal of Pedagogies & Learning 5(2) : Working with Computer-Assisted Language Learning* pp. 3-20, 2009, 査読有
4. Mari Yamauchi. The Impact of Blended Learning with Moodle on Teaching Practice JACET Summer Seminar Committee (Ed.), *Jacet Summer Seminar Proceedings No. 8 Perspectives on Language Teacher Development*, pp.43-47, 2009, 査読有
5. 山内真理, 大学英語教育における ICT 活用, 『神戸海星女子学院大学研究紀要』, 第 47 号, pp.93-119, 2009, 査読無
6. Lori Rink, Mari Yamauchi, Using a CMS, Moodle, in campus-based teaching. K. Bradford-Watts (Ed.) *JALT2007 Conference Proceedings*, pp.93-119, 2008, 査読有
7. Lori Rink, Mari Yamauchi, Integrating Blended Learning into the Language Classroom, 『神戸海星女子学院大学研究紀要』, 第 46 号, pp.195-211, 2008, 査読無

[学会発表] (計 13 件)

1. Mari Yamauchi, Kenichi Kamiya, Managing multiple-choice questions efficiently, MoodleMoot Hakodate 2010, 2010.2.14, 北海道
2. Mari Yamauchi, Effective integration of technology in classroom instruction, International Conference Asia TEFL2009, 2009.8.9, Thailand
3. 神谷健一, 山内真理, 4 肢選択式短文穴埋め問題データベースと問題作成ソフト: 紙媒体素材・e-learning 素材・Moodle 対応型 XML 素材の自動作成, 第 49 回外国語教育メディア学会全国研究大会, 2009.8.6, 神戸
4. Mari Yamauchi, Teaching with web-based tools and materials, GloCall2008, 2008.11.8, 2008.11.12, Indonesia
5. Mari Yamauchi, How to maximize Moodle's quiz module, GloCall2008, 2008.11.8, 2008.11.11, Indonesia
6. Mari Yamauchi, Using Web-based Tools to Promote Active Learning. The 1st JADE-PacADE International Joint Conference, 2008.9.20, Hawaii
7. Mari Yamauchi, Blended Learning with Moodle: Its Impact on Teaching Practice, The 36th JACET Summer Seminar, 2008.8.20, 群馬
8. 山内真理, 自律学習支援における LMS 活用, 日本リメディアル教育学会第 4 回全国大会, 2008.8.12, 神奈川

9. Mari Yamauchi, Using Moodle to enhance learning and foster autonomy, Tech Day 2008, 2008.6.22, 大阪
10. 山内真理, 外国語教育と Moodle: 実践報告, ワークショップ「外国語教育と Moodle: 活用と実践」, 2008.2.7, 神戸
11. Lori Rink, Mari Yamauchi, Using a CMS, Moodle, in campus-based teaching, JALT2007, 2007.11.23, 東京
12. Mari Yamauchi, Lori Rink, Using blended learning to encourage learner autonomy, GloCall2007 Conference, 2007.11.3, Hanoi
13. 山内真理, クラス内学力格差対策としてのブレンディッド・ラーニング: 効果的な「ブレンド」をめざして, 日本リメディアル教育学会, 2007.9.1, 福岡

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

<http://www.mavmeng.net/moodle/>

(授業用 Moodle サイト)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山内 真理 (YAMAUCHI MARI)
神戸海星女子学院大学・現代人間学部・
講師 研究者番号: 40411863

(2) 研究分担者

桐谷 滋 (KIRITANI SHIGERU)
神戸海星女子学院大学・現代人間学部・
教授 研究者番号: 90010032
小野 礼子 (ONO REIKO)
神戸海星女子学院大学・現代人間学部・
教授 研究者番号: 80411859
石原 敬子 (ISHIHARA KEIKO)
神戸海星女子学院大学・現代人間学部・
准教授 研究者番号: 30411854

(3) 連携研究者

村上 正行 (MURAKAMI MASAYUKI)
京都外国語大学・准教授
研究者番号: 30351258